

人文学研究所報 Vol. 1～30

<p>No.30</p> <p>【発刊】1997.3.</p>	『ソフィーの世界』を巡って—サタンと哲学者の対話—湯田 豊
	「オムスピの力」と象徴—象徴的民族論のために—小馬 徹
	British Attitudes towards the Middle—East, 1945—1947—E. M. Carmichael
	ロシア語の完了体は「複数状況」を表すのか—堤 正典
	外国語教育の基本理念—水野光晴
<p>No.29</p> <p>【発刊】1996.3.</p>	中年期女性の「もう一つの人生」—自由記述回答分析から—河上婦志子
	Search for the Best Creative Self: Novels of Willa Cather(3) —Yoshiko YAMAGUC
	冠詞使用の情報処理モデル—水野光晴
	ヘーゲルとインド哲学—『哲学史に関する講義』序論, 東洋哲学について—湯田 豊
	目的各名詞句の主題化—浅山佳郎
	エブリマンの往生—道德劇主人公の求道と救済—奥田宏子
<p>No.28</p> <p>【発刊】1995.3.</p>	So Foul and Fair a Day—マクベスの運命の日—小馬 徹
	ラスキンとブルクハルトのルネサンス観の類似性—鳥越輝昭
	Search for the Best Creative Self: Novels of Willa Cather(2) —Yoshiko YAMAGUC
	ヘーゲル『精神現象学』の序文を読む—湯田 豊
	シャルル・ペギーの文体—創作と反復の手法について—倉田 清
	ことばが成り立つとき—古岩井嘉蓉子

No.27 【発刊】1994.3.	フロイト『文明とその不満』を読むー湯田 豊
	中年期女性のフェミニズムー河上 婦志子
	Irony and Metaphor:a Relevance-based approachーReiko ITANI
	Search for the Best Creative Self:Novels of Willa Cather (1)ー Yoshiko YAMAGUC
	『書 評』 神奈川大学人文学研究叢書(九) 片倉充造 『インディアスの迷宮 1492ー 1992』 神奈川大学人文学研究叢書(十) 松村仙太郎 『聖と俗のドラマ』

No.26 【発刊】1993.3.	Technological Improvements in Socio-linguisticsーReiko ITANI
	アメリカ植民地期のフィリピン通貨制度ー「金為替本位制のドル為替本位制 への変質過程ー永野善子
	イスラームの教義ー湯田 豊
	シャルル・ペギーの死 ー「永遠性」のための「現世性」の闘いー倉田 清

No.25 【発刊】1992.3.	What is the literal meaning of a sen-tence? ーReiko ITANI
	カルデロン劇に見られるドン・キホーテ像ー岩槻園和
	『ブラフマ・スートラ』(第1章1~4)に対するシャンカラの注釈 ーサンスクリット原典からの翻訳ー湯田 豊
	『操觚字要』の書誌考証ー王 宝 平
	反転する言語と言語タブーー荒井由実
	『天気雨』の文化記号的分析ー小馬 徹
	RECEPTION DE CHARLES PEGUY AU JAPONーKiyoshi KURATA
	『書 評』 神奈川大学人文学研究叢書(七) 文京沫 『民族と国家の諸問題』 神奈川大学人文学研究叢書(八) 岩崎豊太郎 『ロマン主義の諸相』

<p>No.24</p> <p>【発刊】1991.3.</p>	セルバンテス:『ヌマンシア』の韻律について—岩根圀和
	ニーチェの『偶像のたそがれ』を読む(1)—湯田 豊
	Japanese Conceots and E. G. Seiden—Sticker's English Translations— Kayoko KOIWAI
	『哲学字彙』の語基と訳語法—その1・語基表—高野 繁男
	女性パート・タイマーの就労ニーズ—「ニーズの一致」説の再考—河上婦志子

<p>No.23</p> <p>【発刊】1990.3.</p>	言文一致理論の展開—高野繁男
	『白蛇伝』の解説—都市と小説—鈴木陽一
	Tat tvam asi コロンブス第1回航海『航海日誌』(IV)—青木康征
	『書評』 神奈川大学人文学研究叢書(六)「白蛇伝の世界—自蛇伝物語の変遷について—」 吉川良和 「もう一つの「長生殿」の世界—楊貴妃死後の構成と演出法—」— 山口建治
	『いま・日本と中国を考える—日中比較文化論—』—大塚秀高

<p>No.22</p> <p>【発刊】1989.3</p>	<p>神観と思想形成—ソクラテスとエピクロスをめぐって—岡野哲士</p>
	<p>目連救母芸能初探—吉川良和</p>
	<p>Chaucer's First Use of Romance Words and Romance—like Words— Kayoko KOIWAI</p>
	<p>『西洋哲学史』—ある日本人の仕事場からのレポート—湯田 豊</p>
	<p>コロンブス第1回航海『航海日誌』(Ⅲ)—青木康征</p>
	<p>弘報委員に関するヒアリング・ノート—吉原直樹</p>
	<p>『書評』 上條雅子論文「日本社会の近代化に関する分析—国際化問題の視点から—」—松島 鈞</p>
	<p>黒沢惟昭論文「ヘゲモニーと教育—アントニオ・グラムシの教育研究・試論—」—井上正志</p>
	<p>鈴木陽一論文「中国の近代化と民族問題」—長谷川清</p>
	<p>著者への交信—柴田隆行</p>

<p>No.19</p> <p>【発刊】1985.12.</p>	<p>ヘーゲルの〈有機体〉論—ドイツ観念論における自然哲学の一断面—伊坂青司</p>
	<p>初期マルクスの価値意識—「ライン新聞」第一・第三論文の再審—黒沢惟昭</p>
	<p>カルデロン・デ・バルカ作『名誉の医者』における“短剣”のイメージの—解釈—ローペ・デ・ベガとの対比において—岩根園和</p>
	<p>Versions of Narrative: A Study of D. H. Lawrence's Sons and Lovers—Ernest CARMICHAEL</p>
	<p>Лебединая Песнь Чехова-Нобуюки НАКАМОТО</p>
	<p>サーンキア・カーリカー(2)—湯田 豊</p>
	<p>『書評』 神奈川大学人文学研究叢書(二)『日本文化—その自覚のための試論—』—森下 直樹 久田 邦明</p>

No.18 【発刊】1984.12.	明治期・医学用語の基本語基と語構成—『医語類聚』の訳語—高野 繁男
	地域生活の拡大・分化と地域集団の再形成—千葉の事例—横倉 節夫
	シャタパタ・プラーフマナー第1書, 第1アデイヤーヤの翻訳—湯田 豊
	笑い—その一面—鈴木 修一

No.17 【発刊】1983.12.	Launce から Launcelot へ—Shakespeare におけるフル誕生と二人の道化役者—佐久間直子
	メキシコ移民とアメリカ合州国—宮井 隆
	サーンキア・カーリカー(1)—湯田 豊
	医学用語における語基と基本漢字—『医語類聚』の訳語—高野 繁男
	『書評』 神奈川大学人文学研究叢書(一)『悲劇—その諸相と人間観』—戸張 智雄 和崎 春日
	網野善彦著 『東と西の語る日本の歴史』—和崎 春日

No.16 【発刊】1982.11.	コナトウスをめぐるホップズとライプニッツ—工藤 喜作
	ドレフュス事件とシャルル・ペギーのドレフュシズム —《ミスティク》と《ポリティック》をめぐる—倉田 清
	ヤスパースとナーガールジュナ—湯田 豊
	イギリス革命期におけるクラブメンについて—岡島 千幸

No.15 【発刊】1981.6.	ユダヤ哲学とスピノザー—工藤 喜作
	タルカ・パーシャー—インドの論理学—湯田 豊
	ラテン・アメリカの文化地理試論『資料紹介』朝鮮通信使と山田復軒(前編)—佐野 正巳

<p>No.14</p> <p>【発刊】1980.6.</p>	ウリエル・ダ・コスタとスピノザ — 工藤 喜作
	比較哲学の課題 — 湯田 豊
	初期デューイの思想形成(3) — 森田 尚人
	和靖唱酬における雲藩儒者の活躍 — 長沢二子(東海・楽浪)と桃白鹿 — 佐野 正巳
	大槻文彦・訳「言語篇」の訳語 — 明治初期の翻訳漢語 — 高野 繁男

<p>No.13</p> <p>【発刊】1979.6.</p>	反ユダヤ思想形成の一例 — ウリエル・ダ・コスタの場合 — 工藤 喜作
	初期デューイの思想形成(2) — その教育関心の成立過程 — 森田 尚人
	ラルクスの『学位論文』についての一考察 — 「具体的普遍」を中心として — 黒沢 惟昭
	大泉黒石とレフ・トルストイ — 黒石の生涯と文学に与えたトルストイズムとロシア文学の影響 — 中本 信幸
	アルタ・サングラハーミーマーンサー体系概要 — 湯田 豊

<p>No.12</p> <p>【発刊】1978.6.</p>	フォイエルバッハの自然特にスピノザとの関連において — 工藤 喜作
	青年マルクス共同態観についての一考察 — 『ヘーゲル国法論批判』『独仏年誌』時代を中心にして — 黒沢 惟昭
	初期デューイの思想形成(1) — その教育関心の成立過程 — 森田 尚人
	ブラジルにおけるヨーロッパ移民と日本移民 — 文化変容の比較 — 石井 陽 —
	泉鏡花とレフ・トルストイ — 鏡花『日本橋』の成立とトルストイ『神父セルギイ』をめぐって — 中本 信幸
	ミーマーンサー・ストラ, I, 1. 1-5 に対するシャバラスヴァーミンの注釈 — 湯田 豊

No.11 【発刊】1977.6.	体制の転換と教育 —「ルソーの場合」— —鈴木 秀勇
	スピノザ, ライプニッツ, フィヒテ—工藤 喜作
	ヤージニャヴァルキヤI—アジア的思惟の源流を求めて—湯田 豊
	少年マルクスの人間社会観についての覚え書 —ギムナジウム時代の三つの作文を 中心に— —黒沢 惟昭
	明治初期の翻訳漢語—「論理学」(『百科全書』所収による)— —高野 繁男
	伝統と文明—その思想史的視角— —後藤 総一郎
	誓い合った仲間のサガ—(胸算用)— —東 保憲
	トインビーの人種関係論—山本 新

No.10 【発刊】1976.6.	ブラジルにおける人種と階級の相関—石井 陽一
	ヘーゲルとシャンカラ —西洋的思惟とインド的思惟— —湯田 豊
	近世国学界に利用された洋学について—泰西地理学を中心として— —佐野 正巳
	ヘルダーの『神』について—工藤 喜作
	文学の司祭的權威—「孤独と文学」研究序説—ラブンケルのサガ—(禁断の馬)— —東 保憲

No.9 【発刊】1975.7.	世界史における時代区分の諸問題(IV) —比較歴史学の前提— 神川 正彦
	国学の成立 —古文辞学とその展開— —佐野 正巳
	独断論と批判論—工藤 喜作
	トインビーにおける中国と日本—山本 新

No.8 【発刊】1974.8.	比較歴史学の一視角 ―ルネサンス問題によせて― 神川 正彦
	汎神論論争について 工藤 喜作
	出雲文化にみるマージン・エリア 佐野 正巳
	「欧化」の総体的反省 ―チャダーエフと漱石― 山本 新

No.7 【発刊】1973.6.	世界史における時代区分の諸問題(Ⅲ) ―比較歴史学の前提― 神川 正彦
	レッシングのスピノザ主義 工藤 喜作
	ダム建設と京浜工業地帯―ダム水没村落をめぐって― 山田 操
	宣長学の展開 ―国学と蘭学の習合― 佐野 正巳
	トインビーの三つの転機 山本 新

No.6 【発刊】1972.6.	メッケルにおける19世紀ドイツと明治前期日本との接触 ―ケルストとメッケル研究を手がかりとした考察― 三宅 正樹
	世界史における時代区分の諸問題(Ⅱ) ―比較歴史学の前提― 神川 正彦
	ドイツ観念論におけるスピノザー 工藤 喜作
	本居学の地方浸透 佐野 正巳
	周辺文明としての日本文明とロシア文明 山本 新

No.5 【発刊】1971.6.	世界史における時代区分の諸問(Ⅰ)—題比較歴史学的前提—神川 正彦
	世俗化の二つのタイプ—ルネサンスと伝播—山本 新
	雲朝廷の軌跡—佐野 正巳
	ゲーテの“Studie nach Spinoza”—工藤 喜作
	ロシア外務省外交文書集とポクロフスキー—独語版と邦語版をめぐる 考察—三宅 正樹

No.4 【発刊】1968.3.	比較思想論序説—作者と読者—神川 正彦
	ロマン主義哲学者, シュライエルマッヘルのスピノチスムについて—工藤 喜作
	二十世紀初期イギリス詩論の展開—相原 幸一

No.3 【発刊】1967.3.	ヤスパースと仏教思想—草薙 正夫
	禅と実存哲学—信太 正三
	禅のコトバと一般意味論—神川 正彦
	比較美学—山本 正男

No.2 【発刊】1966.3.	実存的思想家としての兼好—草薙 正夫
	明治二十年代における思想的営み—神川 正彦
	比較文学—太田 三郎
	トマス・モアと“ユートピア”—飯田 耕作

No.1 【発刊】1965.3.	三木清と実存哲学との交渉—信太 正三
	私の「比較文学」への道—島田 謹二
	明治維新論の再検討のために—神川 正彦